ぼくの宝物

小　六

ぼくは、重い心臓の病気で生まれたので、すぐに大きな病院に入院した。心臓の大動脈と肺動脈が逆についているだけでなく、心室に大きな穴が開いていたのだ。この病気は、酸素不足でくちびるやつめの色がむらさき色になり、呼吸が速くとても苦しいので、手術が必要だった。

生後二か月の時、最悪な状態になり、生きるか死ぬかの大手術をして、やっとぼくの命が助かった。さらに、気道が狭いこともわかり、のどに穴を開ける手術もした。命が助かった代わりに、両足が動かなくなった。原因はわからなかった。母は、ぼくの命が助かった喜びと、ぼくが笑うことだけで、足のことなんて何とも思わなかったそうだ。

手術が成功したので、少しずつ良くなり、ぼくの体は成長していった。二才と四才の時も手術をして、自分で動けるくらいに元気になることができた。この頃のぼくは、手を使って、座ったまま自分の体を移動させていたため、すぐにつかれてしまい、家の中だけで遊ぶことしかできなかった。

そんな時、車いすというプレゼントをもらった。車いすに乗ってタイヤを手で回すと、前に進むのがうれしかったのを覚えている。車いすに乗れば、自分で好きな場所に自分の力だけで行

けることがうれしかったのだ。
　ぼくは、自分の足で立てないので、歩くというのがどんな感じかわからない。でも、車いすがぼくの足になってくれたので、自分で自由にどこにでも行ける楽しさがわかった。だから、車いすはぼくにとって「一番の宝物」だ。
　車いすに乗っていると、
「大変だね。かわいそう。」
と言われることがあるけれど、ぼく自身は、全くそう思ったことがない。車いすに乗っていても、ふつうの人と変わらないと思っている。
　車いすに乗っているぼくは、元気そうに見えるけれど、心臓病が治ったわけではなく、病状が良くなっただけで、今でも心臓病と戦っている。例えば、暑いと人一倍体温が上がり、寒いと血液のめぐりが悪くつかれやすくなり、熱が出てしまうのだ。だから、冬の体育は、長そで長ズボンでやらせて欲しい。夏は、涼しいところで休ませて欲しい。
　ある冬の寒い日、体育の時間に
「なんでみんなは半そで短パンなのに、あったかいジャージを着ているの。」
と言われたときは、ショックだった。「ぼくは、心臓病と戦っているんだ。理解してくれ。」と思うと同時に、「みんなと体育をやりたい。車いすでもいっしょにやらせて。がんばるから。」と心の中でさけんでいた。
　林間学校では、リフトに乗って山の頂上にも行けた。砂利道でも動ける車

いすのタイヤをつけて、みんなが弁当を食べているところにも行けた。運動会の組体操では、みんなといっしょに肩を組んで、みんなの輪に入ることができた。百メートル走もみんなといっしょに走ることができた。

今まで車いすでは、みんなといっしょにできないとあきらめていたことができた。車いすに乗ってできたのだ。みんなが車いすのぼくを助けてくれたからできたんだ。

「みんな、ありがとう。」

両親も、祖父母も、ぼくの姿を見て喜んでくれた。がんばって良かった。あきらめなくて良かった。車いすがぼくの足になって、願いをかなえてくれたのだ。だから、車いすは「ぼくの宝物」なのだ。